

「昭和のくらし博物館」－先人の知恵に学ぶ

第二特別調査室長

こんどう としゆき
近藤 俊之

最近、大田区南久が原にある「昭和のくらし博物館」を訪ねる機会があった。この博物館は、昭和25年に始まった政府の住宅政策により、住宅金融公庫の融資を受けて昭和26年に建てられた普通の民家であったが、この時期の貴重な建物であるとして、平成14年に国の登録文化財の指定を受けたものである。ここでは明治43年生まれの小泉スズさん(故人)が昔ながらのやり方で家事(炊事、洗濯、裁縫等)を行う様子を記録した「昭和の家事」というドキュメンタリー映像を定期的に放映している。ナレーターは元NHKアナウンサーの加賀美幸子さんが務めている。家事の映像は、漫画のサザエさんを彷彿とさせるところがあって興味深い、今回は「昭和のくらし博物館」の建物・展示(昭和26年当時の国民の暮らし)を見て感じた感想を述べてみたい。

この建物が建設された昭和26年はまだ戦後の混乱期であり、現代の感覚からすれば、国民の生活はほとんどサバイバルに近いものであった。家にガスはなく、調理は家の外に^{かまど}竈を作り、^{たきぎ}薪を燃やして煮炊きをしていた。風呂も家の外にあり、やはり薪で沸かしていた。洗濯物は洗濯板と^{たらい}盥で洗ったが、洗剤はなく、石鹼は貴重品で、代用品として^{あく}灰汁が使われた。女性にとって最も重労働の家事は洗濯物を絞る作業であった。また、アイロンの代わりに火鉢で暖めた^{こて}鋏を使っていた。

当時と比べると、我々は電化製品等に囲まれた便利な生活を享受している。しかし、仮定の話ではあるが、一昨年に発生した東日本大震災のような災害に巻き込まれたら十分に対応していくことができるのであろうか。震災直後の報道を見ると、避難所では1日1食(菓子パン)、暑くてもクーラーはなく、寝るときは雑魚寝で布団があれば良い方ということのようである。このような状況においては、電化製品等の文明の利器は全く使えず、「昭和のくらし博物館」の展示に見られるような先人の知恵(かつてはそれが日本人の生きていくための能力であり、生活の知恵であった)が再び役に立つ可能性がある。例えば、被災者が協力して、避難所の外に五右衛門風呂を設置する時などにおいてである。このように、電化製品等の文明の利器がない中でも、自分達の手で様々なことに対応できる能力を高めていく必要があるが、そのためにはかつての日本人の知恵が十分参考になるとの感想を抱いた。